
愛しい人へ

PIKACHU\$?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しい人へ

【Nコード】

N6751Y

【作者名】

PIKACHU\$?

【あらすじ】

16歳 高校一年目で

あたし（菜津）わ

人生2度目の

大恋愛をした。

短くて儂くて

嘘で塗り固められた

恋愛だけど

それでもあなた（たこ）を

愛しく思うあたしわ

バカですか？

今でも大好きです。

〜プロローグ〜(前書き)

実話なので良かったら

読んで見て下さい^^/?

くプロロ・グく

あんたが一番やねん。

大好きやねん。

この先ずっと居れるって
信じてたんやで？

2年後の2人の未来を
ずっと夢見てた

今もあたしにわ
あなたが必要です。

ねえ。あなたわ何を

想いあたしの隣に

居たの？

ねえ…

あなたが吐いた

たくさんのお優しい嘘わ

最後まで吐いてくれなきゃ

優しい嘘に

ならないんだよ…？

”た-”今でも呼びたく

なるよ…

あたしだけが呼んでた

呼び名なのにな…

好きだから手を離す

愛しいから側に

居たくないんだ。

浮かれてたあたしの隣で

あなたわ一体

何を想って居たの…？

く買い物く

あたし（菜津） 16歳の”夏”

「ピンポン」

午前10時頃

あたしの家のベルが鳴った

「はあ………い」

とドアを開けると

「ちよりっす」

そう言いドアの前に

居たのわ”ゆう”だった

”ゆう”わ他地区の友達で

中3の頃から

仲良くなりだし

今でわ大事な親友。

「用意できたあ？」

「出来てるよ」

「じゃあ行くっか」

あたし達2人わ今日

地元で買い物する約束を

していた。

「にしても暑すぎやん」

「本間それ！！！！」

「温暖化しすぎ……」

「早く店入る 入ろっ」

そう言いあたし達わ

自転車を止めて

店の中に入った。

2時間程店内をブラつき

疲れたのでマクドに

行こうと言う話になり

2人で店を出た。

あの時あの出口から

出ていなかったら

あたし達出逢って

なかったのかなあ？

やっぱり人との出逢いわ

突然なんだね。

く出違いく

何となくいつもと

違う出口から出た

あたしとゆう

その出口わマクドとわ

真逆だった。

「真逆じゃんっ!!」

と突っ込むゆうを見て

「いいじゃん(笑)」と

爆笑するあたし。

突然ゆうが「っあ…。」

と言いながら指を指した

私わゆうが指を

指した方向を見る。

ゆうわ

「涼君やん！！久しぶり」

”涼”とわあたしの高校の

友達でたまに一緒に

遊んだりもする。

だからゆうとも

知り合いだった。

「げえーうるさいペアやん」

「誰がうるさいペアよ（笑）」

そう言い合う涼とゆう

あたしわ涼の後ろに立つ

もう1人の存在に

気がつき

「てか誰か初めまして居てるやん」

「お - 俺の親友や」

と言われあたしわ

挨拶をした

「わあ - 。初めまして

涼と同じ高校の菜津です

涼の親友とか大変ですね（笑）」

すかさずゆうも

「本間それ〜（笑）だって涼うるさいし（笑）
てか、**高校のゆうでえ - - - つす」

「うわ - きしよいきしよい」

と涼が口を挟むので

ゆうわまた涼と

言い合いに戻って

しまった。

この日初めてあなたに

出逢いました。

出逢った日わ何にも

感じなかったのね

く 出逢い2く

「こんにちわ。」と

ペコッと頭を下げる

あなた

この時わ名前すら

知らなかったんだね

何となく気まずくて

涼とゆうの言い合いに

混ざる

そしてゆうが

「お腹空いたからこんなバカ涼君ほっとしてもうマクド行こっ」

「お。はよ行け行け」

「自分ら2人本間うるさいし（笑）」

と笑うあたし

ふとあなたを見たら

あなたも笑っていたね

「っぢゃ。解散!!」

そう言ったのわ涼で

2人わ店の中へと

入って行った

あたし達2人わ

そのままマクドに

向かった。

マクドに着いて

メニューを頼み終わり

席につくと

「はあゝ。疲れたあゝ」

と2人同時に言い合う

そして荷物整理を始め

少ししたら頼んだ物が

来てガールズトーク

スタート

この時何であたし

こんな事口に出したん

だろね…

くガ－ルズト－ク

始めに口を開いたのわ

ゆうだった。

そして決まってこの話題

「さっきの人誰なんだろうね？」

「っえ？涼の友達ー…」

「ぢゃなくて！名前！」

「っあ。そういえば聞いてない…」

「あははっ（笑）」

菜津が名前聞き忘れるとか珍しいね
何かあんぢゃないの？（笑）

とジュ－スを飲む、ゆう

そうなんだ

あたしわ高校に入ってから

初めましてでわ

絶対名前最初に聞くんだ

てか普通でしょ？

なのにあなたにわ

聞くの忘れてたんだ

「何もないから！！けど何かもう逢わない気がして…だからいつかなあゝ見たいな」

「逢わない気で…」

初対面でもう逢わない気するとかどんだけだよ（笑）

とゲラゲラ笑うゆう。

でもね本当にそんな気がしたんだよ？

まあ外れたけどね

「涼君に電話して聞こうよ！！」

「何で?!」

「っえ？だってあたしも気になるし」

ゆうが楽しそうに

言ってくる

「ん〜。めんどくさ。まあいいけど」

とめんどくさそうに

《発信》ボタンを

押したあたし。

”プッププップ…カチャ

3コ・ル程で電話に出た

「何？」

「さっきの初めましてさん名前何て言っん？」

「狙ってるんか？（笑）」

「ちがうわ！バカ！」

名前聞いてなかったから

気になっただけ」

「名無しのごんべえ（笑）」

「はあ?!」

涼わそこからちよけて

名前を教えて

くれなかったの

「もういい」と

電話を切るあたし。

ゆうわ「何て？」と

言った

「さあね？涼がバカな事ばっか言って教えてくれなかった」

「まぢで。涼君いらこ（笑）」

それから2人で名前の

予想をしてゲラゲラ

笑い盛り上がっていた

ねえ。何でだろうね

あの出逢いが

こうなるって

何で気づけなかったん

だろうね？

くく・やの家

次の日あたしわ学校で

涼といつものように

喋っていた

でも何故かあの人の話題

わ出なかった

涼が突然

「なあ！今日遊ぼや！くく・やも居るし！帰りそのままくく・やの家行こ」

”くく・や”とわ高校同じで

涼とわ中学も同じで

涼を通じて仲良くなった

「今日？

今日何かあったっけ？

ん……。多分無いからいいよ」

そして放課後になり

あたしわ涼とく・やの家に
向かった。

”ピンポ・ン”と鳴らすと

「はあ・い…。」と

く・やの眠そうな声

”ガチャ”とドアが開くと

目をこすりながら

出てくるく・や。

涼わすかさず

「お前学校来いや！っで。いつまで寝てんねん（笑）」
と笑いながら言う

「ん…行く行く
とりま俺風呂入るからリビング行ってて」

「はあ・い」とあたし達

2人わ返事をして

奥のリビングへと向かった

そこであなたと

また逢ったね

く名前く

”ガチャ”

リビングのドアを涼が

開けるとそこにわ

あなたが寝て居ました

「うおっ！慶太！！何してんお前！！」

と涼が叫ぶと

「ん〜。」「

こちらもく・や同様

眠たそうだ

「っあ。涼おかえり

何って？寝てたけど？」

「お前帰ってくんの早くないか？」

「テスト一週間前やから

部活オフでしかも5時間

だから帰ってきてく・やに連絡しとらずと寝てた」

「俺も部活オフ」

「いえいつ」と

2人でハイタッチしている

「何か可愛い(笑)」と

あたしわ呟いた

涼わ調子に乗って

「やる?(笑)」

「あ・きもなくなった(笑)」

「えゝー」

とちよけるあたし達を

見て笑うあなた

あたしわあなたの

方を見て

「そう言えば

涼がさつき”慶太”(けいた)って呼んでたよね」

とにつこり微笑むあたし

「おう。そやで。

俺”慶太”って言うねんよろしくなっ
」

つとにつこり微笑んだ

「慶太かあー…

予想外れたなあ（笑）」

「予想？」

不思議そうに

首を傾げる慶太

「うん。昨日予想してたの（笑）

あたし達の予想わ”けん”だったんだけどね」

「なんぢやそりゃ

期待外れですいません（笑）」

と笑うあなた

それからく・やも混じり

4人で色んな話を

していた

夢の話や将来の話

中学校の話や

連れの話

何となく呼びにくくて

慶太の事を”慶太君”と

呼ぶ事にした。

あの時からこうなるって

決まってたのかな？

くビクドンく

その夜流れるに

食べに行こうとゆう話になり

あたしわ

「ゆうも呼ぶ!」っと言い

携帯の《発信》ボタンを押した。

”プツプツプ…カチャ

「はあ…い」

「っあ。ゆう?あたしだけど
今からご飯食べに行かない?」

「いいよ…どこ行けばいい?」

「ビクドン前に来て」

「りよ…かあ…い」

”プチツ プ…プ…

「来るってさ」

20分程してからゆうが来た

「こんばんわあ〜」

「ゆう〜予想外れた（笑）」

「っえ?!名前わかつたん?!」

「うん 慶太君」

「あら?けんぢやなかった?」

「うん。違っかったね（笑）」

と話すあたしらを見て

涼が「とりま中入る」

と言いあたし達わ中に

入り席に着いた

「あ〜腹減つたあ〜

何食べよっかなあ?」

と子供のようににはしゃぐ涼

「俺チニズ」と慶太

「俺卵」とくニヤ

あたしわメニユニと

にらめっこ

「ん〜ど〜しよ〜。」

と悩んでいると慶太が

あたしの頭をポンツと叩き

「何にする？」と聞いて来た

それがあまりにも予想外で

いきなりだったから

あたしわ顔が

カア

と赤くなり

「ぢゃあチニズ」

それを見逃さなかった

ゆうと涼。

「涼く〜ん何かあの顔赤〜い」

とゆう

「ほんと〜だあ〜どうしたの〜？暑い〜？
でもここ冷房訊いてるよね（笑）」

と涼。

「この2人悪魔だ…」

そうあたしわ思った

「うざい うざい

ちよつと暑かったただけだよ！！バカ！！」

「あはははは」とゲラゲラ
笑うゆうと涼。

「何なんだこの2人…」

でもあたしわ心の中で

「あたしが好きなのわ涼何だけどな…」

と思っていた

そう。あたしわこの時

涼の事が好きだった

何とか頼み終えて

ハンバ－グが来て

みんなで語りながら

食べた

慶太君とゆうも

それなりに喋るように

なったし

「楽しかったな」と帰りに

涼が言った

「本当だね」とゆう

何か終わりみたいに

聞こえたからあたしが

「ま…」言おうとした瞬間

「また来ようぜ」と慶太君

「被った…てか以心伝心？」

と慶太君の顔を見て呟いた

慶太君わ「ん？」と

首を傾げた

「何でもない！！！」

と目を反らす

そして私達わ解散した

〜その日から〜

それから毎日遊ぶように

なつたあたしと涼と

慶太とく・やとゆう

2週間慶太と涼が

部活が休みなので

学校が終わるとく・やんの家

ボ・リング、ゲ・セン

遠出したり家でだらしたり

1週間あつとゆう間だった

水曜日

涼が彼女と

別れた

涼の彼女わ中3で

2週間くらい付き合っていた

浮気が原因だった

涼わ前の彼女もその前も

浮気が原因で別れていた

その度にあたしわ涼の話を

聞いていた

この日の夜も…

涼わ今までで一番好きだった

と話す

泣きながら…

「菜津：俺のどこがあかんかったんやろ？

俺な本間に好きやってん

可愛くて可愛くて

嫌や言うてん…浮気ぐらい許したろって

けどな無理やってん…

年下に浮気されるてダサいな俺…ははっ」

この瞬間いつも思うんだ

この純粹で崩れ落ちそうな
あなたを守りたい
あたしなら裏切らない

って。

「あたしわ涼かっこいいと思う。
だって涼わいつでも真剣ぢゃん
こんなに彼女思いつてすごい
涼わ強いんだよ……」

「ありがとう。」

でも俺わ弱いよ……もう女わ信じないし要らない」

「っえ……？」

” やばい ” あたしわそう思った

涼が女を作らないと

言う事わあたしが涼の

彼女になれる可能性が

0になる事を意味してる

「世の中そんな女ばっかりぢゃないよ……」

あたしわ無意識に口に出していた

「じめんな？」

それから少し話をして

帰りながらあたしわ

「あゝダメだな…涼を慰める言葉

何にも出てこない

気の利かない女ってきつとあたしの為にある言葉だ」

何か涼と最近無性に

距離を感じる…

この時からかな？

～涼に対して～

あたしわ家に着き

涼を好きになってからの

事を色々考えていた

「もう4カ月かあ～…」

涼を好きになってから

4カ月が過ぎていた

その時だった…

～

「電話…」

画面に表示されていたのわ

《く・や着信中》

「もしもし？」

「お前何か声暗くない？」

「そうかな？」

「涼か？」

”ドクンッ”

「何で…？」

「涼が菜津に悪い事したって
俺気持ち知ってるのに…ってさ」

「つえ…？気持ち知ってる？」

「うん。涼わお前の気持ち知ってるよ」

く・やの言葉が信じれなかった

知ってて女要らないって…

「あたし眼中にないんぢゃん…ははっ」

「それわ分からんけど涼わお前の事良い奴だって」

「そんなの要らないよ…」

だってねいい人って

所詮いい人止まりでしょ？

あたしわく・やと電話を切り

携帯を投げて寝転んだ

「いい人に何かなりたくないんだよ……」

そしたらまた

く
く
く
く

「く・やかなあ？」と

あたしわ携帯を手に取り

画面を見た

《080*****着信中》

「ん？誰？つあ。切れた」

音が鳴りやんだ

「誰だったんだろ……？」

この電話からだねきつと

～気持ちの変化～

しばらくするとまた

～
～
～
～

《080*****着信中》

「まただ…」

あたしわ電話に出た

「もしもし?」

「うい………っす!」

「ん?その声…慶太君?!」

「当ったり…」

なあに暗い声してんだよ」

「いやいや。何で電話番号知ってるの?」

「さあ?」と笑いながら

答える

そして少し話を切る

「何で知ってるんだろ？」

そして次の日あたしわ

いつものように

く・やの家にゆうと居た

「涼と慶太君ま〜だ〜？」

この日わ2人共

来るのが遅れて居た

「まだだよ」「とく・や

「まだ1分しか経ってないじゃん」

とゆう

「はあー…」

「どんだけ涼に逢いたいんだよ（笑）」

とく・やがちやく

ゆうもそれに乗っかり

「涼が来たたらあんたにやけてるよ（笑）」

「そんな事無いから!!」

と否定する

”ピンポン”

「涼だ!!」とあたしわ

慌てて玄関を開けに行く

「ちわつす」

「ちわ・・・っす」

とあたしが言つと

あたしの行動を見た2人が

揃って「ほら（笑）」

つと笑う

あたしわそんな

2人にせずに涼に

「大丈夫？」と問いかける

涼わ「当たり前」と

ニコつと微笑む

でもあたしにわその涼の

笑顔がひきつつつっている様に

しか見えなくて…

「涼…」

でもあたしにしときなよ

何て言えない

あたしわ”良い人”だから

涼を困らしたらいけないんだ

あたしわニコつと微笑み

「そっか お菓子食べる？」

と無理に笑った

ちゃんとこの時伝えてたら

傷つけなくてすんだのかな？

結局この日慶太君来なくて

電話もわからないまま

でも少し涼に近づけた気がした

あたしだけだったのかな？

〜涼との距離〜

あたしわ毎日電話を

涼にかけた

話のネタが無くても

涼が女要らんって言葉を

口にしても

明るく振る舞い続けた

涼がまた遠くに感じた

もう諦めモードのあたし

ゆづに電話をかけて

毎日

「やっぱり無理かな？」

「いけんぢゃないの？」

と前向きなゆう

「でも良い人だよ？」

とネガティブなあたし

「でもそれって印象が良いって事でしょ？」

毎日こんな話を繰り返していた

「もう。諦めようかな

あたしにわ涼がなに考えてるか全然わからないよ……」

…「ゆうも無言になる

土曜日

朝からあたしとゆうわ

く・やの家に居た

「どっか行く……よ……」

とあたしわく・やとゆうに

話かける

「まだ涼が来てないだろ」

とく・やわ冷静に話す

「ん〜」

何か涼に逢いたくないあたしわ

憂鬱な気分だった

”ピンポン”

いつもならあたしが出るが

今日わ動かないあたしを見て

く・やが玄関に向かった

それを目で追いかけると

く・やと涼が何か話している

そして結局どこにも行かず

く・やの家でたらたら

夜になり今日わ早めの解散

地元に戻り愛方に電話する

「っあ。もしもし春？」

”春”（はる）とわあたしの愛方

中1から仲が良くて

高校も同じ

「どしたあ？」

「ちよつと喋ろーや」

「竜も居てるけどいい？」

”竜”（りゅう）とわ

春の彼氏であたしが

中学校の時大恋愛した相手

未だに竜を越える人わ

現れない

「いいよ」と返事し

春の家に向かった

〜2人の存在〜

春の家の前にわ

竜と春が座って居た

「寒くない？」と春

夏が終わりかけて

夜わ少し冷える

「うん。寒いね」と答える

何か久々なこの空気

この2人わあたしの居場所

信じてるし大好きなんだ

「最近何してん？」

「ちよつと涼とね…」

「ん？」と首を傾げる春

竜わ静かに聞いて居た

「距離感じるんだよねー…」

「距離？」

「何か一歩退かれてるって言うか…
近ずいたと思ったら離れて…」

「なんぢやそりゃ（笑）」

春のこうゆうところが好き

しんみりした空気にならない

竜が口を開いた

「お前気にしすぎなんだよ。涼だって何か考えてんだから考えさしたれや」

「何かなあー…」

色々話をして解散した

この2人わ本当に大好き

今までたくさん

支えられてきた

この2人わあたしの

居場所で

あたしもこの2人の

居場所になりたかった

春？あの時もつと

話してたら良かったね

近すぎて話せない何か

言い訳だったね

〜裏切りの前〜

次の日あたしわ

学校が終わるとゆくと

く・やの家に居た

今日わ火曜日だ

涼も慶太君も部活が

休みなので遊ぶ事に

なっていた

「2人共おっそ…」

とあたしが呟くと

「本間菜津わせつかちだな」

とく・やが言う

30分後

”ピンポーン”

「涼だ!!」とあたしわ

いつもの様に

玄関に走る

”ガチャ”

「つよ。久々」

そこに立って居たのわ

慶太君だった

「うん。だね」

と答えると

「何あからさまにがっかりした顔してんだよ（笑）」

とあたしの髪をぐちゃぐちゃ

にする慶太君

「してないよ…」

と言いながら少しがっかり

「予想外れた事無いのにな…」

あたしわ涼がインタホン

を鳴らすと直感で涼だ！

と分かる

だから違うと思ったら

動かない

今まで外れた事が無かった

「また予想かよ（笑）」

と笑いながら言う慶太君

その時

く
く
く

く - やの携帯が鳴った

「もしもし？…わかった」

とく - やわ電話を切ると

「涼、今日来れないって」

「えー!!何で?!」

と言ったのわあたしだった

「用事だよ」

「そ・ゆうとこが距離感じるんだよ……」

と呟くあたし

この日涼が来てたら

こんな事にならなかったの

かも知れないね

夜までく・やの家で語った

珍しく盛り上がるあたし達

「く・やの家で誰も寝ないとか奇跡でしょ」

とゆづが笑いながら言う

「眠くならないくらいずっと騒ぐとか初だね　いつもどんどんだけ盛り
上がっても急にみんな静かになって寝るのにね（笑）」

とあたし

8時頃になり

「今日あたし彼氏なんだよね」

とゆうが言った

ゆうが帰った

3人になった時

まったく・やの携帯がなった

く
く
く

「もしもし?…わかった。じゃあ今から行くわ」

と言いく・やが電話を切った

「誰?」とあたし

「おとん。飯食いに行く言ってるから

10分で帰ってくるし公園かどっかで待ってて」

とく・やが言ったので

みんなで家を出た

何であんな事

しちゃったんだろね

く・やわ途中でバイバイし

いつもの公園に

慶太君と向かった

〜裏切りの日〜

公園に着くと

いつもの遊具に座るあたし

「何か変な感じ…」

とあたしわ呟く

「ん？そうかあ？」と

慶太君

「うん。」と頷くあたし

続けて慶太君が

「寒くね？！俺極度の寒がりなんだよね。無理だわこの気温」

「そんなに寒いかなあ？」

と言いながらあたしわ

煙草に火をつける

” ジュポ ”

「ふー」と一息着く

「おっさんみたい（笑）」

と慶太君わげらげら笑い

ながらあたしに言った

「いいよ別に。」

「てか寒いから菜津カ・デイガン貸して」

そう言った慶太君を見ると

寒さで震えていた

でもあたしわカ・デイガン

の中が半袖だった為

さすがに半袖わ寒いと

思い

「いやいや。あたし中半袖だから無理だよ」

と言った

あたしがあの時貸してたら

こんなに狂わなかったかもね

「ぢゃあ菜津隣に座って」

”ドクンッ”

「嫌だ」

無意識に出た言葉

「お願い」

と言われ寒さに震えていて

ほっとけないからと

自分に言い聞かせ隣に座った

何故かすごく緊張する

だって夜の公園で2人つきり

誰だって緊張するでしょ？

だからあたしわ無理に

口を開いた

「あたしの手暖かいよ？
体温高いからね」

”ギョツ”と慶太君に

握られたあたしの手

「ほんとだ。暖かい」

と慶太君

いつもなら緊張しないのに

妙にへんな感じがする

と思っっていると…

ガバッ

”?!?!?!”

あたしわ慶太君に

抱きしめられた

「菜津暖かい」

いやいやおかしいでしょ

この状況

「これわまずいっしょ…
彼女に悪いよ…」

そう。慶太君にわ彼女が居た

「大丈夫」

とあたしに微笑む慶太君

「何が一体大丈夫？」

とあたしわ心の中で思った

けどあたしわズルかったね

それ以上何も言わずに

慶太君の背中をさするあたし

すると

「足寒い…」

「いやいや。あたしの身長考えて？足まですとか無理だよ」

とあたし

「あぐらかくからその上に座って」

”?!?!?!”

何言い出すんだこの人と

あたしわ思っていた

彼女がいる人が言う台詞

ぢゃない

でも確かに震えていて

あたしわ行ってしまった

後先何か何も考えてなかったんだ

”慶太君にときめいた”

ただそれだけの理由で

この手を取っちゃ

ダメだったんだ

夜の公園で抱き合ってる

2人

周りから見たら恋人に

見えるかも知れないね

く裏切りの日々

しばらくしたら

く - やが来た

あたしわく - やが

来た頃にわ眠かったから

慶太君の肩に顔を

埋めて目をつぶっていた

く - やわ何も触れずに

慶太君と話していた

1時間程すると

「いとこ迎えに行かなあかんから……」

といいく - やわ帰った

その時あたしの耳元で

慶太君が

「眠いんか？くーや帰ったで？」

と言いながら

頭を撫でてくれた

その声が優しくくて

とつても心地良かった

そして色々話して居て

あたしわ眠さの限界だった

「ふわぁー……」

「いけるか？」

「うん……」

首もとで慶太君が

「起きろって」

と囁く

それがくすぐったかった

「くすぐりたいよ…首噛むよ(笑)」

目の前に慶太君の

首があつた為あたしわ

こう言った

「できるもんならやってみる」

と意地悪そうに笑うから

”ガブツ”

噛みついてやった

「痛ッ!!」

「ふっ(笑)」

あたしわ笑った

”ガブツ”

「痛ッ」

「やり返し」

次わあたしが噛まれた

「くすぐつたいし…」

次の瞬間だった

” チュッ ”

ほっぺにキスされた

「っえ？」

「ははっ顔真っ赤（笑）」

と意地悪に笑うあなた

「もう…」

とあたしわ言いながら

少し嬉しかった

涼が振り向いてくれなくて

最近ドキドキもしなかった

あたしにわ久々の感覚で

慶太君わゲラゲラ笑っていた

だから…

” チュッ ”

「 仕返し。 顔赤いよ？ (笑) 」

とあたしわ笑う

「 うっせえよ 」

” チュッ ”

不意討ちだったんだ…

「 っえ？ 」

「 顔真つ赤か (笑) 」

「 だって口…だめだよ彼女いるぢゃん？ 浮気だよ？ 」

「 ぢゃあもうしない 」

「 ぢゃあもうしないって… 」

あたしわ何故か寂しくなった

シユンとすると

「 んっー… 」

” ！？！？！？ ”

慶太君の唇が触れ

舌があたしの口の中に

「ぶはっ！！」

「お前が悪い」

”！？！？！？”

何言ってるか分からない

浮気してあたしが悪い？

いやいやおかしいでしょ

あたしフリーだし

この時既に狂ってたんだよ

すべてが…

く涼への気持ちく

その後わお互い何も

言わずただただ

抱きしめられていたあたし

そして家に帰った

「あ・あ。」

慶太君が何考えてるか

全然分らない…

ど・してあんな事したのか

次の日学校であたしわ

く・やに捕まった

「おい！」

と呼び止める声わ

少し怖かった

「何…？」

「ちよつと来い」

あたし達2人わ人気の無い

階段に座った

「お前慶太とキスしたろ？」

「っえ？何で…？」

「慶太が言うてたわ。お前涼わ！！」

と怒鳴るくーや

あたしわ泣けてきて

「だって…涼…最近あたしに…冷たくて…寂しくて…慶太君…の暖かい手…が」

と泣きながら話すあたし

「寂しい事も辛い事もあるかも知れやん。でもお前そんなんしてていいんか？」

くーやの言葉わかる

けどど・しても今わ

慶太君が気になる

「ぢゃあケジメつける
はつきりする」

あたしわ強い目で

く・やを見た

「わかった」

と言いく・やわ教室に

戻った

「ど・しよ……」

涼の事わ好きだけど

最近何か違う気が

するんだ

く喧嘩く

色んな事を考えて

ゆづに相談していた

そしてある日の夜

「はあ?!」

と怒鳴る春

そうあたしと春わ

今喧嘩している

理由わあたしが春に

隠し事したからだ

「そんなキレんでもええやん!」

とあたしの逆ギレ

「形だけの愛方向かいらんねん!」

と言い合いになり

「もうええわ」と

春わ帰ってしまった

あたしわ泣き崩れた

その時無意識に

涼に電話をかけていた

「もしもし？」

「涼……」

泣いてるあたしに

気づいた涼わ

「どした？」

と聞いてくれた

そこから涼と色々

話をしていると涼わ

「愛方わ大事にしなあかん

例え話にくい事でも春わ受け止めてくれるやろ？守りたいんやろ？

お前にわ春が一番なんやろ？」

「うん…」

「わかってるやん

ちゃんと春と話しろ」

と涼の言葉が

あたしの中に響いた

「ありがとう」

と言つと電話をきり

春と話をし

仲直りした

「やっぱりあたしにわ涼が必要！」

この時確信したんだ

〜決断〜

ある日の夜地元で
集まった日

つて言っても女の仲いい子
3人と竜

「涼に近々告ります」

いきなりあたしわ宣言した

「いきなり何？（笑）」

とみんな首を傾げる

「あたしにわ涼が必要って分かったから」

とあたしわみんなに

これまでの事を話した

みんなわ「いいんじゃない？」

と賛成してくれた

数週間後

「いつ告るん〜?」

と言ったのわ春だった

「いつにしょかなあー」

とあたしわ返す

「はよせえよ」「と竜

「何の話?」と

ニヤニヤしながら

言うのわ”幸”(こころ)だった

”幸”とわ中学が同じで

3年時クラスも同じだったが

仲良くなったのわ

卒業してからで

最近仲良しだった

「幸にわ関係無〜い」

とあたしわ言った

いきなり春が

「今！！今にしよ！！！！！！」

と言い出したので

あたしわキョトンとし

「いやいや無理無理」

と冷静に言った

「いや！今にしよ

ぢゃないとお前知らんで？」

と竜が脅す

「何か知らんけど賛成」

とニヤニヤしながら幸

あたしの携帯を持ち

春が「はっしーいーん」

つと涼に発信ボタンを

押した

「あゝーーーーっ!」

とあたしが叫ぶと

”プツプツ はい…?”

運悪く涼わすぐに出た

春わ

「涼?菜津が話あるらしいよ」

とニヤニヤしながら

言いつと

「はいっ」と

電話を渡してきた

「いやいや無理っしょ…」

と思いつながら

「もしもし…」と

電話を変わった

そして少し離れ

深呼吸をして

あたしわ話始めた

正直今言わなきゃ

無理な氣したし

「あのさ。涼…」

「どしたの？」

言葉が緊張で詰まる

「知ってると思うんだけど…」

数分沈黙が続く

「涼の事好きなの

っで。良かったら付き合っで欲しいなあ〜何て…」

「…」

あたしの頭わ爆発寸前

「っあ…無理っで分かってるけど

けどね…一回だけ真剣に考えて欲しいの」

とあたしが言うつと

「わかった」

と涼が言った

そして電話を切り

みんなのところに帰り

「言っちゃった…」

と言つと

「やったちゃん

つで。何て？」

「考えるって…」

あたしわ煙草を吸う

スピードが尋常ぢゃない

くらい早くなつた

〜返事〜

あたしわ待っている間

憂鬱で仕方なくて

時間が長く感じた

1日目が過ぎ2日が過ぎ

3日が過ぎた日の夜

涼からめえるが来た

”今何してる？”

こんな単純なめえるでも

いつも喜ぶのに

喜べない

あたしが適当に返すと

”そっぴゃ返事まだだったよね”

「うわ。来た…」

あたしわ齒をくい縛り

” うん…” と返した

何分か後

” 俺やっぱり友達にしか見えない”

と書かれたためえるを見て

「やっぱりね…」

とあたしわがっかりする

ほんの少しだけ期待してた

” わかった。ありがとう”

「はあ…」

とあたしわ落ち込む

次の日あたしわ

何故かあまり落ち込まずに

学校に行った

そしたらく-やに

また連れて行かれた

「何？」

「涼にフラレたやる？」

「ほんとデリカシ - 無いね
一番触れて欲しくないのに」

「まあ聞けって

涼、お前が慶太とちゅ - した事知っててそれなかったらもっと考え
たらしい

けどそんな事する女信じられへんて…

涼わ過去が過去だから余計にな…？」

「うん…」

あたしわ教室に戻り

考えていた

何で気づかなかったんだろ

涼が1番嫌な事分かってた

はずだったのに

” あたしならしないのに ”

「何がだよ……」

あたしわ後悔した

涼の事傷つけた

あたしわ自分が最低な女

だと自分を責めた

涼？

なんであの時あんな嘘

ついたの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6751y/>

愛しい人へ

2011年11月22日04時04分発行